

.....

うきたむ考古通信

.....

2021年11月号

■発行者	うきたむ考古の会
事務局	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 内
	〒992-0302 山形県東置賜郡高畠町安久津2117
	電話0238-52-2585 Fax 0238-52-4665

展覧会のご案内

👁️ 第29回企画展 「山形県の近世城郭と出土品」

9月11日(土)～12月5日(日)

9月号でも予告しましたが第29回企画展が好評開催中です。城郭に興味をお持ちの、いつもの展覧会とは異なる顔ぶれの入館者が多くなっています。また、10月以降新型コロナ関係の規制が解除されましたので、関西や中四国を含む遠くにお住まいの方の入館も少なくありません。

展示内容は前回もお知らせしましたように第一章舘山城、第二章米沢城、第三章山形城、第四章新庄城、第五章鶴ヶ岡城、第六章亀ヶ崎城と発掘調査で出土した、中世末から近世初めに県内6ヶ所にあった近世城郭の様々な資料を展示するのは初めての試みです。会員の皆様にもぜひ足を御運び頂きたいと思えます。

館事業報告

👤 第23期考古学セミナー

第29回企画展「山形県の近世城郭と出土品」に関連したテーマで9月26日、10月4日、10月17日に3回にわたり考古学セミナーが開催されました

第1回(9月26日(日))

米沢城跡の発掘調査と出土遺物

米沢市教育委員会 菊地 政信 氏

米沢城の本丸域は長井氏時代から営まれと考えられること、また、二の丸や三の丸は上杉氏が入部してから整備されたが、検出された建物跡の柱の特徴や柱根の年代測定、礎板、出土した遺物から、それ以前の長井氏の時代は庶民の住み、伊達氏時代にも家臣団が済んでいたと考えられるとのこと。米沢市教委が調査した二の丸跡の調査区は寺や有力家臣団の家は礎石建物で、その外側には、随分あとまで掘立柱建物跡が残るとのことでした。

舘山城跡の発掘調査と出土遺物

米沢市教育委員会 佐藤 公保 氏

舘山城跡は山城を中心とした中世～近世初期の城館跡です。米沢市では、平成22年度

から館山城跡整備事業を開始し、平成 28 年 3 月 1 日に山城及び同時期の山麓居館（根小屋）と推定される平場の一部が国の史跡に指定されました。館山城は要害呼ばれた山城と、麓の河岸段丘にある館山御館と呼ばれた館山北館・東館・南館とからなる。このうち、北館、東館から山城と同時期の遺構群が発見されており、山城と山麓居館が一体となった遺跡群です。

最近の発掘調査で慶長後半から元和年間の石積技術が発見され伊達氏が岩出山城に移ってから上杉氏が城の整備を行ったことが判明しています。また、現在は一部しか残っていない「並松土手」は伊達氏後半の輝宗・政宗が築いた土塁と考えられ、館山城は「惣構」を彷彿とさせる城であったとのことです。

第 2 回(10 月 3 日(日))

山形城跡の発掘調査と出土遺物

山形市役所

齋藤 仁 氏

I 中世最上期の山形城、II 近世最上期の山形城（最上義光の時代）、III 江戸前期：1620 年代～1660 年代～鳥居氏から奥平松平氏の時代～、IV 江戸中期：1660 年代～1750 年代奥平氏から（大給）松平氏の時代、V 江戸後期：1760 年代～1860 年代第二次幕領期から水野氏の時代、VI 明治維新以後の山形城・藩という構成で山形城の始まりから廃城・その後の利用までの山形城跡の変遷が二コマにわたって詳細に述べられました。

I 中世最上期の山形城の遺構は幅 10m の堀が巡る居館であったと推定され、後の本丸・二の丸・三の丸とも墓があり葬送と政治が一体化していたということです。

II 最上義光の時代には 57 万石を領する大大名となり、山形城は三の丸まで含めると全国で 5 番目、堀と土塁で整備された東国一の壮大な規模であったということです。本丸御殿には金箔瓦が葺かれ、同じ瓦が秀吉の時代の京都伏見城や大坂の最上屋敷跡で出土しているとのことです。本丸中央部の石組み溝からは 16 世紀末～17 世紀初頭の国産・輸入陶磁器が多数出土し、国産陶器には唐津・備前・丹波・信楽・京焼・瀬戸美濃・岸窯等広範囲のものがあるとのことです。

III 最上氏が改易された江戸前期の譜代大名鳥居氏時代には領国は減ったものの東国の押さえとして重要視され、二の丸・本丸は高石垣を持つ門と石垣を持つ隅櫓となったということです。現在史跡山形城はこの時代に焦点を当てた整備が進められているとのことです。また、二の丸土塁では発掘調査で屏風折れ土堀の存在が確認されたとのことで、この発見は国内では初めての例ということです。

IV～V 期の江戸時代中期の 1688 年以降、後期にかけて山形が左遷地となり、城主の交代の度に石高を減らし 10 万石から最後は 5 万石となり、城内の荒廃が進み、秋元氏時代には領主も三の丸御殿に住むことになり、本丸は儀礼の場に特化したとのことでした。

VI 期の明治 5 年に払い下げられ、明治 29 年には陸軍歩兵第 32 連隊が入部し本丸石垣・土塁を破脚し堀に埋め立て、整備が進むまで、その姿が続いたということでした。

第 3 回(10 月 17 日(日))

鶴ヶ城跡の発掘調査と出土遺物

(公財)山形県埋蔵文化財センター 菅原 哲文 氏

鶴ヶ岡城跡は、江戸時代に酒井氏の庄内藩 13 万 8 千石の居城として整備されました。中世には「大宝寺城」と呼ばれ、室町時代初期頃に大泉荘の地頭であった武藤長盛によって築城されたと伝えられています。室町時代の武藤氏は、足利将軍家との関係を維持し、武藤淳氏は出羽守に任じられていましたが、戦国時代になると、武藤氏は庶族であった砂越氏と対立し、大宝寺城下は戦火で焼かれ、本拠は大山の尾浦城に移されたとのことです。

1583 年に武藤義氏は最上氏に内通した家臣により滅ぼされ、1587 年には最上勢が庄内に侵攻し、最上氏の支配下となりましたが、翌 1588 年本庄繁長は上杉氏の後援をうけ庄

内に侵攻し、十五里ヶ原の戦いで最上勢を破り、庄内は実質的には上杉領となりました。1590年庄内の検地に反対する一揆が起きましたが直江兼続により平定され、直江は大宝寺城を修復したという記録があります。関ヶ原の戦い後は1602年、庄内は最上義光の領地となり、最上義光は、大宝寺城を「鶴ヶ岡城」と名前を改め、隠居城として整備されたということです。城内の建物の造営、堀、土塁を整備、二の丸に重臣の屋敷を置き、城下町の建設を行いました。1622年の最上氏の改易後、酒井忠勝が入部すると鶴ヶ岡城を拡張し、二の丸・三の丸を整備し、町屋を城外に移したということでした。

以上のような変遷の中で発掘調査区ではつぎのことが明らかとなったということです。

大宝寺城期には室町時代から安土桃山時代にかけてと考えられる遺構が検出されたということです。中土手の整地層中や下に掘立柱建物跡の柱穴や溝跡が整地層中から大量の輸入陶磁器類が出土しており、建物跡が継続的に建てられていたということです。他に中世の遺構として火葬骨が出土する墓壇が4基検出され、溝跡、竪穴状遺構、土坑も確認されました。

調査区は絵図面に描かれた二の丸南側の張り出し部分に相当し、絵図面では建物等は描かれていないが、建物の一部や2条の平行する小礫を敷き詰めた溝跡が確認されました。最上氏時代の家臣屋敷関係する建物の可能性があるとのことでした。

遺物の時期的な出土傾向をみると、特に15世紀になると、輸入陶磁器の青磁・白磁の出土量が多くなり、あわせて国産の古瀬戸・珠洲焼・越前焼の出土量も多いということでした。この時期は、武藤氏が安定した支配基盤を維持していた期間に相当するということです。

16世紀代も、青磁・白磁・青花、瀬戸・美濃の陶器などが一定量出土しているということです。

16世紀末から17世紀にかけての時期の遺物は、出土量が少なく、日用品に限られますが、当期は武藤氏が衰退・滅亡し、上杉氏や最上氏と支配が移る時期であったということです。

江戸時代の遺物は、陶磁器においては肥前産が主で日用品が中心で、また江戸後期の遺物の出土が多く、廃城の際に捨てられたものと考えているとのことでした。

亀ヶ崎城跡の発掘調査と出土遺物 (公財)千葉県教育振興財団 高桑 登 氏

1478年遊佐太郎繁元が東禅寺城を築く。

1583年前森蔵人が城主になる。

1593年甘粕景継が城主になる。

1598年志駄修理亮が城主となる。東禅寺城の整備。

1599年志駄修理亮が城郭を拡張。1600年慶長出羽合戦。

1601年最上勢による東禅寺城攻撃。志村光安が城主となる。

1603年亀ヶ崎城と改名。城下の町割り、整備。1622年最上氏改易。酒井氏入部。

亀ヶ崎城の遺構は上記のような変遷をたどったということです。

2003・4年の第4・5次調査による成果はつぎのとおりであるとのことでした。

16世紀前半の1期ではD区2面・B区堀下層で掘立柱建物を中心とした居住域と堀(障子堀か)が検出されました。

16世紀中葉の2期ではA区3面・B区堀下層・C区2面・D区1面・E区3面の居住域が後の本丸部分にも拡大するとともに、排水のための溝の掘削が行われました。

16世紀第4四半期の3期ではA区2面・D区1面上層・E区2面北側に礎石建物を中心とした居住域があり、庭の可能性のある石敷遺構・落ち込み状遺構が検出されました。

17世紀初頭の4期ではA区1面・C区1面・B区・E区1面に近世の絵図に描かれた

堀、土塁が成立し、居住域の周囲に廃棄土坑群が分布するとのことでした。

出土遺物は多彩で重要なものが多いということでした。

陶磁器では輸入陶磁器・瀬戸美濃・志野・織部・越前・備前・肥前陶磁器があり、量も多く、多彩な産地からもたらされていました。

木簡には荷札木簡が多く、慶長出羽合戦の緊迫した情勢を物語る武器・弾薬に付けられたものは特に目を引くとのことでした。他に、輪島そうめん、さとう等と記された食料品の木簡や、鬺茶札、箱の蓋、天目台等の容器に関連するもの、羽子板などの遊戯具、漆器の椀、調理具、下駄等の木製品、槍、短刀、火縄などの武具、漁撈具のヤス、それに、食料残滓である動物・漁骨などあるということでした。また、全国的に見ても出土例が少ない犬形土製品、福井県産の笏谷石を使った方形石鉢もあるということでした。

なお、考古学セミナーの当日の配布資料(pdf)は当館ホームページからダウンロードできますので、御覧になっていただきたいと思います。また、講座の様子をビデオ撮影しました。当館ホームページからアクセスできますので、参加されなかった方で、関心のある方はぜひ御覧ください。

♥秋の遺跡めぐり

当初は10月10日(土)に予定していた秋の遺跡めぐりは11月7日(日)に変更して開催されました。南相馬市は国指定史跡の宝庫で今回は市の南半分の史跡と博物館を前福島県考古学会長の玉川一郎氏の案内で廻りました。今回訪れた施設と史跡はつぎのとおりです。

南相馬市博物館

この地域の歴史、自然史、考古、民俗に関する分野の展示となっています。自然史では南相馬市の地形、地質、化石(古生物)、野生の動植物、天然記念物について紹介されています。メインは相馬の伝統行事である野馬追の展示で、迫力のある馬の模型とDVDが上映されており、美しい甲冑等が展示されていました。DVDは20分ほどで構成され、南相馬を紹介するものでした。展示は南相馬市の歴史の原始・古代では旧石器時代から平安時代まで、市内の遺跡から出土した資料を中心に展示されていました。史跡桜井古墳・羽山横穴・泉廃寺跡ほか、近年の発掘調査の成果から当時の人々の生活や文化について説明が行われ、市内金沢の長瀬遺跡より移設した古代の竪形製鉄炉も展示されていました。他に「中世・近世」、「近代・現代」、「民俗」のコーナーがあり、企画展では「中村藩と近代のはじまり」が開催されていました。



史跡「羽山横穴」(はやまよこあな)

太田川の北側の丘陵傾斜面に立地する数十基から成る横穴群の一つで、1973年宅地造成中に偶然発見されました。全長は8.32mを測り、前庭部長3m、羨道長1.9m、玄室は方形プランを呈し、奥壁幅2.79m、側壁長2.9m前後となっています。奥壁には酸化鉄(ベンガラ)で描いた人物・馬・鋸歯状文・縦長の長方形文、さらに白色粘土を塗り、その

上に赤彩斑点をあしらった白鹿、5本の紅白線で連結した渦巻文、赤彩の鹿などが認められます。奥壁と天井には赤白 250 以上の珠文も描かれています。墓室の床からは金銅製太刀・鉄製馬具・青銅製釧・ガラス製小玉・土師器・須恵器が出土しました。築造年代は7世紀初頭と推定されています。

羽山横穴のような壁画がかかっている古墳を「装飾古墳」と呼ぶが、装飾古墳は茨城・福島・宮城県の太平洋岸と九州地方に多く分布しているということです。

通常は公開されていませんが、市教委のご高配で、解錠していただき、特別に見ることができました。



県指定史跡「小高城跡」(おだかじょうあと)

鎌倉時代の末期から江戸時代の初期にかけて、約 280 年間にわたり奥州相馬氏が本拠としていた城です。小高川の北側の丘陵に築かれ、南を流れる小高川を外堀とし、西から北にかけても堀が巡っていたと想定され、水域に囲まれていた姿から、別名「紅梅山浮舟城」とも称されていました。

城跡内に鎮座する相馬小高神社は、江戸時代は相馬氏代々の守護神である妙見を祀っていた社で、国指定重要無形民俗文化財の祭り「相馬野馬追」での神事「野馬懸」の開催地となっています。現在でも土塁などが良く残るほか、中世城郭の様子をよく示すものとして、県の史跡に指定されています。



昼食「故郷喫茶カミツレ」

東日本大震災で被災・廃業した綿屋呉服店の跡地に 2019 年の 1 月に完成した小高交流センター内で営業する「故郷喫茶 カミツレ」で貸し切り状態の中での昼食でした。事前に注文した肉料理と魚料理に舌鼓を打ちました。



史跡「大悲山の石仏」(だいひさんのせきぶつ)

南相馬市小高区泉沢にある薬師堂石仏・阿弥陀堂石仏・観音堂石仏を合わせて「大悲山の石仏」と呼ばれ親しまれています。

仏像の様式から、製作時期は平安時代と推定され、1 千年以上も前にこの地で比類なき仏教文化が花開いたことを示す貴重な歴史遺産であることから、昭和 5 年に国史跡に指定されました。観音堂石仏は東日本大震災で拝観所の建物が倒壊しましたが復元工事で新たな姿を見せています。この工



事に先立つ発掘調査で 9 世紀初頭の土師器が出土し、平安時代前葉まで溯ることが明らかにされたということです。東北地方で最大・最古の石仏群であることから、栃木県宇都宮市大谷磨崖仏、大分県臼杵市臼杵磨崖仏と並んで日本三大磨崖仏に数えられ、日本有数の石窟寺院と評価されるにもかかわらず、この石仏を作った人達や歴史的背景は詳しくわかっていないということです。



薬師堂石仏は大悲山の石仏の中で最も保存状態が良く、凝灰質砂岩を削り抜いた間口 15m、高さ 5.5m の岩窟の壁面に、浮彫で 4 体の如来像と 2 体の菩薩像を、線刻で 2 体の菩薩像と飛天を彫り出しています。首が太く、肩が張り、胸幅の広い、量感のあるどっしりした如来坐像の姿は、平安時代前期の特徴を備えています。

観音堂石仏は、この石仏群の本尊であったとされる十一面千手観音坐像で、保存は良くありませんが、高さ 9 m を測る日本最大級の石仏で、厚肉に彫り出されたたくさんの手のうち 2 本を頭上に挙げて化仏をささげ持つ独特のポーズは、京都の清水寺の本尊である十一面観音像と共通することから、「清水型」と呼ばれています。観音像の左右両翼には、薄肉彫で数多くの化仏が刻まれている。この磨崖仏は、元禄期に奥州中村城主相馬昌胤によって奥相三拾三所観音が定められ、その中の第二十七番札所にもなっています。

阿弥陀堂石仏は形も明らかでないほどに剥落が激しく、現在は仏像と思われる芯の部を残すのみで、阿弥陀仏が刻まれていたと伝えられています。

この、石仏群も拝観所の奥は常時施錠されていますが、ここの、市教委の特別は計らいで見せていただくことができました。

史跡「浦尻貝塚」(うらじりかいづか)

福島県浜通り中北部に位置する縄文時代前から晩期にかけての貝塚です。南北に延びる舌状の段丘上には、竪穴住居、柱穴群、貯蔵穴、土坑墓が密集し、竪穴住居が分布する中央部は直径約 60m にわたって掘削され、平坦部を作出していたことが明らかとなっています。全部で 4 箇所 of 貝層が確認され、段丘南側の東西斜面には 3 箇所の貝層が分布し、いずれも東西 15 から 20m、南北 30 から 40m、最大厚 1.8m と大規模です。また、段丘南側では晩期前半の貝層が確認されています。魚類ではスズキなどの内湾性種が多く、ウナギのほかにはハゼ、イワシなどの小魚も多い特徴がある。動物ではシカ、イノシシの他にカモ等鳥類が多い。さらに晩期ではヤマトシジミやフナ等の増加から汽水から淡水域の利用拡大、大型



サメ類やマダイの増加、骨角製漁労具が多く出土するなど外洋域の利用なども顕著となる。漁撈活動の変遷も明らかとされました。

浦尻貝塚は縄文時代前期後葉から晩期前半にかけて長期間形成され、遺構群の分布状況から周辺集落の中核的な集落として位置付けられる。また、貝塚と集落が伴って確認できることから、これらの変遷や形成過程にも関連性を認めることができ、各貝層の動物遺体群は当該地域の縄文時代の生業と環境の関わりを考える上でも重要であるとのことです。震災後 10 年を経て今年度から史跡整備事業が再開されたということです。

史跡「横大道製鉄遺跡」(よこだいどうせいてつせいせき)

福島県南相馬市小高区飯崎にある製鉄遺跡です。太平洋岸から 7km 内陸に入った標高 50m の丘陵上に立地し、南北 240m、東西 60m の細長い舌状丘陵のほぼ全体に広がっています。2007 年～2009 年の発掘調査で木炭窯、製鉄炉、廃滓場が良好な遺存状況で確認され、遺跡の範囲と内容を確認するための発掘調査も行われました。製鉄炉をともなう環状遺構、単独の製鉄炉、廃滓場といった製鉄関連遺構は丘陵北側の先端部に集中するのに対し、製炭を行った木炭窯は丘陵中央部や南部に 31 基が集中することから、作業ごとの区域分けがあったと考えられています。環状遺構は、丘陵の平坦な部分を直径 10.8m、深さ 1.2m ほど掘り、その掘削土を直径 20m の環状に盛り上げた遺構で、その内部に複数の竪形製鉄炉が造りこれを造り替えて継続的に製鉄を行っていたと考えられています。このほか 9 世紀前半から中ごろの踏み鞆のある長さ約 180cm、幅約 50cm の長方形箱形炉も含めて、製鉄炉が 10 基確認され、炉の周辺からは純度の高い鉄の塊も見つかっています。廃滓場は 4 カ所確認され、68 トンにもものぼる鉄滓をはじめ箱形炉の鞆の羽口や炉壁も多数出土し、9 世紀前半から中ごろの製鉄に関連した廃滓場とみられています。福島県域の海岸一帯は浜砂鉄が豊富で、古代の宇多郡と行方郡は製鉄が盛んな地域でありました。砂鉄を集めて原料とし、木炭を燃料にして鉄を生産していました。この遺跡がある行方郡域では、まず 7 世紀後半に、海岸に近接した金沢地区で製鉄遺跡が出現しますが、燃料が枯渇し、8 世紀後半になると横大道製鉄遺跡のように内陸部に移りますが、10 世紀前半になると製鉄遺跡は姿を消します。横大道製鉄遺跡は 8 世紀後半から 9 世紀中ごろの製鉄炉・廃滓場・木炭窯がそろってよく保存され、その規模や遺構の数量においては東北地域屈指の大規模な製鉄遺跡であり、当時の政治的・社会的状況を知るうえで重要な遺跡として史跡に指定されました。ここで生産された鉄は主として蝦夷との戦いに使われる武器の原料になったと考えられています。



今後の館主催事業・自主事業委員会共催事業の案内

企画展講演会

11月14日(日)

演題 「近世城郭と石垣」

東北芸術工科大学 北野 博司 氏

※募集人数が定員となりました。

今後の体験事業の予定

- 「ガラス玉をつくろう」
11月27日(土)に開催します。完全予約制となります。
- 「からむしで布をつくろう」(あんぎんをつくろう)
12月4日(土)に開催します。完全予約制となります。
- 「古代風プレスレットをつくろう」
12月4日(土)に開催します。完全予約制となります。
- 「大人の自由研究2ー塩引きをつくろうー」
初めて開催する事業です。遊佐町に遡上したサケのオスを使い、新巻鮭を作ります。初日はヌメリを取り、内臓、エラを除去し、塩を塗り込む作業を行います。2日目は塩抜きをしたサケを洗い、干すまでの作業を行います。なお、初日の作業後、持ち帰ることもできますので、塩抜きから後の工程となる2日目は自由参加とします。
12月5日(日)・11日(土) 募集10名(新規事業)完全予約制となります。
※募集を開始しましたが、ご希望の方はお早めに電話で申し込んでください。

東北情報館

感染症拡大防止のため、他地域との往来はご注意くださいようお願いいたします。



第29回企画展 『山形県の近世城郭と出土品』

入館料 一般/200円 大学生/100円 高校生以下/無料

9月11日～12月5日 うきたむ風土記の丘考古資料館 TEL: 0238-52-2585



開館20周年記念企画展 『上杉家伝来 能面・能装束』

—語りはじめた面袋—

入館料 一般/700円 高大生/450円 小中生/300円

10月16日～12月8日 伝国の杜 米沢市上杉博物館 TEL: 0238-26-8001



致道博物館日本名刀展シリーズ 『山形ゆかりの刀工』

入館料 一般/800円 高・大生/400円 小中生/300円

10月22日～11月28日 致道博物館 TEL: 0235-22-1199